▶OfByForコラム◀

地域の地域による地域のためのSomething NEWS

第32回

「3E」から「3E＋S」、そして「3E＋SA」

――エネルギーとアートの序説

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco.jp
代表理事 佐藤 建吉

▼3Eというキーワードについて

従来から日本のエネルギー政策のキーワードとして、3Eが提唱されてきた。3つのEとは、「エネルギー（Energy）」「経済（Economy）」「環境（Environment）」である。最新のエネルギー基本計画では、3E＋Sとして、「安全性」（Safety）が追加されている。それは、東日本大震災に連動して発生した福島第一原発事故に由来してのことである。

3Eについては、かつて「トリレンマ」（trilemma）として説明していた時代があった。それは、エネルギー政策は、エネルギーの安定供給のほか、環境対策と経済成長を両立する必要があり、全体として三立しなければならずトリレンマであるとの解釈や思考であった。それは、あたかもエネルギー政策が困難な課題であるとの付箋のようにも思われる。

が、3Eの三立もしくは三者共存を目標とする社会づくりに向かう合言葉として、率直にこれだけを合唱するのでよいのではと、筆者は考える。事実、Sが追加され、トリレンマとの整合性は、もはや取れていない。

▼「新エネルギー」とは

再び従来の話題であるが、「新エネルギー」という経済産業省発信の術語が、かつて使われていた。その典拠は「新エネルギー法」にあるが、主に日本国内での称呼であり、最近は「再生可能エネルギー」が常用され、新エネルギーという術語に置き換えられている。

こうした変遷は、エネルギー供給や需要という状況変化に由来する。しかし、重要なことは、法律によりその呼称が、状況に与える影響の大きさである。明らかに、世界標準と国内標準のミスギャップが、エネルギーにおける状況に遅速をつくり出している。

「新エネルギー」の対象が、〝経済性の面における制約から普及が十分でないもの〟であるという烙印は、その普及に影響を与えた。従来あった経産省資源エネルギー庁の担当課名は、「新エネルギー対策課」であったが、「対策」しなければならない対象として「新エネルギー」、という意識の象徴に見える。

本紙は、『新エネルギー新聞』と称しているが、経産省のいう「新エネルギー」とは異なり、いま時代が創り出している再生可能エネルギーの新化や進化の状況に掛かる情報を伝える、という意味ではないかと筆者は理解している。Facebookによれば、「持続可能な社会の実現に向けて、再生可能エネルギーを中心とした新エネルギーの普及促進をサポート。業界の健全な発展と、地方の活性化を支援します。」とある。地方の活性化についても、一家言を述べようとしている。

さて、本稿では、3Eから3E＋Sへの変遷に倣い新たに「アート（Art）」をキーワードに追加したい。「3E＋SA」となる。キーワードを増やすと、それぞれの重みが低下する恐れがあるが、「アート」は、各キーワードを包括的にとらえ、普及や価値を向上させるポテンシャルを持っていると考えている。以下、その真意を述べる。

▼エネルギーと経済の重要性

古典的な表現では、「石炭は産業のコメ」と呼ばれた時代があるように、エネルギーは、活力の源泉である。本コラム㉙に記したように「能源」である。十分なエネルギーの確保が、大事であり、国レベルでは国家安定の要件である。それが、「エネルギーの安定供給」が唱えられる背景でもある。

経済は、また国の豊かさや国民の幸福の前提ともなっている。しかも、「経済成長」が課せられている。が、外的及び内的な多様な原因により、景気という症状に観られるように、経済成長には、ゼロ成長やマイナス成長などという言葉が、いまは用いられる。

エネルギーと経済は、密接な二大相補関係である。

▼環境の意味と理解

環境はどうだろう。「環境」は、主体者を取り囲む外的な条件であるが、その意味に主体者を含んではいない。例えば、「地球環境」とは、主体者の地球の表層での人間たちの生活圏を対象とした用語である。「居住環境」も、身の回りの条件を指し、主体者の人や個人は含まない。環境のエネルギーとの関係では、主体者も対象にしないと、真のエネルギー問題の理解や解決にはならない。

▼アートの持つパワー

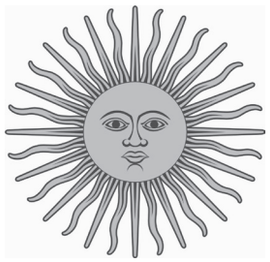
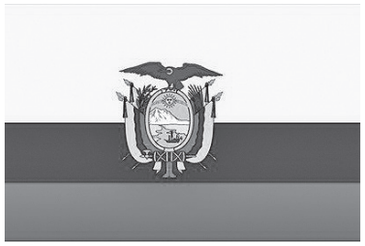
「安全性、S」の必要性は自明である。筆者が、さらに必要であると選んだのが「アート」である。「アート」は、一般には芸術が直達的な意味であるが、「知恵」という意味もある。知恵は、技術でもある。私たちのエネルギーに対する関わりは、その国際的な「需要拡大」、「資源枯渇」、そして「持続可能性」というトリレンマの真っただ中にある。その解決の切り札が再生可能エネルギーであり、太陽の恵みに由来する。

これまで、人間の優位さを励みとして人工の時空間を都市に求めてきた。いま、その解決策が求められている。対策のよりどころは、「知恵」にある。従って、環境技術、経済予測、エネルギー技術も、実は「アート」にある。もちろん、アート本来の芸術性も解決策の中に織り込む必要がある。

関連して掲げた図が、赤道直下の国、エクアドルの国旗である。年中毎日、等しく太陽の恩恵を受ける国である。太陽神を象徴的にアートにしている。

▼エネルギーとアート

著作『アートと社会』（竹中平蔵・南條史生の編著、東京書籍、2016年）がある。本著は2部構成で、「アートと社会」、「社会とアート」として、主客を入れ替えて、12名の識者が相補的に論じている。アートの持つパワーのほか、その文化的な潜在性と顕在性を述べている。残念ながら、社会の中において、「エネルギー」には触れていない。

追補的に、筆者がここで触れておきたいことは、「アートとエネルギー」について、そして「エネルギーとアート」についてである。その詳解は、パブリック・アート論として、次回に述べたい。

エクアドルの国旗。太陽神の「インティ」が、〝アート〟されている